

層雲峡開発史の一齣

竹 中 英 泰

河野常吉『大雪山及石狩川上流開発探検史』

“富士山に登って山岳の高さを語れ。大雪山に登って山岳の大きさを語れ。”

これは、大町桂月けいげつが、一九二一（大正一〇）年八月に、塩谷温泉（現在の層雲峡）から黒岳沢を遡行し、旭岳に登頂し松山温泉（現在の天人峡）に下山したときのことを書いた『層雲峡より大雪山へ』（『中央公論』一九二三（大正一二）年八月号所収）の冒頭の一文である。著名な文人により総合雑誌『中央公論』に掲載されたことで、ほとんど無名の層雲峡と大雪山を一気に全国に知らしめた。層雲峡という呼称もこの時以来のことだ。大町桂月は、一八六九（明治二）年の生まれ、旅を好み、名勝地の探訪や登山を愛好し、隨筆などや漢混交の美文家としても有名で、講演や揮毫会などで全国を回っていた。この時も七月初めから道内各地を行脚しながらの山行であった。

この紀行文は、その後、河野常吉『大雪山及石狩川上流探検開発史』（大雪山調査会刊行、一九二六（大正一五）年）に付録として

収められた。この『探検開発史』によれば、当時の登山は、松山温泉から旭岳へ登り、また元の道に戻るのが一般的で、開校五年目の庁立上川中学（現在の旭川東高校）の教諭五名が、一九〇七（明治四〇）年に、学生有志四五名を引率して「忠別筋より登山し大雪山の絶頂に至りて帰った」とあり、以後同校の年中行事となったという。そして、大町桂月一行の登山は、この旭川中学（大正四年に改称）から天幕を借り、比布駅から徒歩で層雲峡に向かい、黒岳沢を遡って黒岳、北鎮岳、白雲岳、旭岳を経て天人峡に下った。いまの上川町と塩谷温泉に各一泊、山中三泊の山行であった。右にみた旭川中学とは別ルートの登山で、ルートをつくりながら登るさまが描かれている。

清水敏一『大町桂月の大雪山』

二〇一〇年三月刊行の清水敏一『大町桂月の大雪山』（北海道出版企画センター）を読むと、この山行は、実は未踏・未開拓のコースへの挑戦、すなわち当初の予定を変更してのことであったという。それによれば、塩谷

温泉若主人・塩谷忠は来旭した桂月に對し、ルート変更を当時の旭川区長ともども懇願した。一九〇〇（明治三三）年の温泉発見からようやく温泉経営に踏み出した層雲峡を世間に広く認知してもらおう絶好の機会ととらえてのことだった。このルート変更の申し出に對し、桂月は同意。登山の様子を、天を仰いで「鬼神が天上に樓閣をつくれるか」と書き、頂上に至っては「大雪山は実に天上の神苑なり」と全国に紹介した。同行した塩谷本人すら実はこのルートに関して途中までしか窮めていなかったため、果たして踏破できるかどうか不安を抱えての山行だったという。ともあれ、桂月の美文は、観光地・層雲峡を全国区の名勝地に押し上げるきっかけのひとつとなった。

なお、上記両書によれば、この桂月登山の翌年、塩谷温泉は洪水で家屋等すべてを流失し、実業家・荒井初一に経営一切が譲渡された。荒井は道路整備や橋の建設など再建（後に層雲閣に改称）に奔走する一方、一九二四（大正一三）年、自ら会長となって大雪山調査会を創立した。旭川中学教諭・小泉秀雄は学校登山を率いる一方、この調査会の調査員として総合的な大雪山学術調査に大きな足跡を残し、塩谷忠は旭川の住居をその事務所として会の運営実務を担った。そしてこの三人は、大雪山の学術調査・観光開発を推進した三大功労者と言われ続けている。

へたけなか ひでやす・旭川大学経済学部教授